

寮母は宝

某日、老人ホーム任運荘の静養室では終末期のお年寄りの左右に、寮母たちが看病につきまわっていた。老人は目を閉じたままなのに、突然、からだをさすってあげている看護婦の顔に拳こぶしを振った。眼鏡がとぶ。看護婦の表情が変わったのも一瞬、さすがプロ、すぐ平静に戻って介護を続ける。お年寄りは二日後に昇天していった。

こうした思いがけない仕打ちに、寮母たち皆があいながら、多くのホームでは老人に黙々と仕えている。「寮母は宝」とつくづく思う。

だからといって、老人ホームはすべてに安心できるという確信もない。某ホームで「余分の物を持ち込むなといわれ、思い出の写真も焼いてきた」と老人が嘆いていた。入所入り口で死ぬ思いをし、死んだつもりでホーム生活に耐える。「老人ホームで三度死ぬ」わけである。たしかに、「施設はこわい」所でもある。

先日、東京の施設長研修会で講義をしたが、受講生から質問があった。「寮母は宝」といい、施設はこわいともいう。どちらが本当か」と。ちゅうちよなく私はいずれも

本当と答えた。

某日、民生委員たちが来訪、寮母主任の概要説明の時、冒頭に「ただいま理事長は寮母は宝といったが、私たちは夢にもそう思っていない。私たちの宝はホームのお年寄りです」とお断りしていた。彼女の巧まないこの言葉こそ、まさに宝である証明といえよう。

珍しく、日本最南端の老人ホーム石垣島の寮母二人が任運荘を訪れた。一泊して別際に寮母主任に問うた。「おむつが濡れたらすぐ換えている。どうしてそんなに徹底しているのか」と。「ここで恵まれた仕事の機縁を与えてくれたのが理事長。お年寄りを理事長と思ってお世話しているのでなければ、とても続くものではない。でないと、してやってあげているという考えがつきまとう」と答えたらしい。「そうでしたか。沖繩から来たかいたが あった」といって、緒方を去っていった。

(一九八一年八月二十四日)